

の過程を短縮して、早く言語的概念的に整理された理論を得させようとするならば、それは単に断片的な表面的な知識をふやすだけでなく、自ら知識を求めていく能動性、子ども自身が新しい場へのぞんで自由に主体的に考えていく能力の発達を阻害してしま

永瀬義郎さんのこと

永瀬義郎氏は一八九一年（明治二十四年）生まれ、茨城県岩瀬町のご出身。十三歳で美術雑誌に応募して受賞されたことに始まり、十九歳の時、上野美術学校（現在の芸大）彫刻科に入学されたが、のち京都美術学校（現在の京都美大）に移られ、東京の荒木十畝塾で日本画も学ばれた。昨年六月東京で開かれた、「日本版画史を生きたる永瀬義郎のすべて展」の目録によると、「生来の放浪癖から……」とあるが、実に多彩な生活を送られて現在に至った方である。そして、北原白秋、広津和郎、日夏耿之介、長谷川潔氏らに始まる交遊の広さは、年を追うごとに広まって、永瀬義郎という方の作品ばかりではなく人間の魅力をうかがわれる。一九二九年三十八歳の時フランスに遊学、七年間パリで活躍され帰国後しばらく関西で制作活動をされた。第二次世界大戦中は中央画壇から離れて地方文化の高揚を計られ、終戦後上京されて再び版画制作に入られた。その後は当然のことのように八十四歳の現在も、かくしゃくと

うおそれがある。これからの社会で生きていくのにほんとに必要な、認識能力の発達障害をひきおこしてしまうのではないか。これでは知育偏重というよりも、真の知育ではないといえよう。

（つづく）（大阪教育大学）

して世界的に活動されている方である。

* * * * *

私がこの永瀬さんのことを知ったのは、この版画展の紹介をテレビで見たのが初めてでした。今回幸せなことに表紙にいただくようになった。「もの想う天使」はか数点と永瀬さんご自身がご出演になったのです。私は直感的に「この方は本当に、もしかしたら子どもよりも子どもの心をもった方がいない」と羨しいまでに思いました。そしてさっそく会場に出かけてすみからすみまで、胸をワクワクさせて見せていただきました。その時お見かけた永瀬さんは白と赤の大柄のアロハを召した白髪のおじいさま（失礼）でした。一生懸命となかど話しておられたのでご遠慮して、奥さまにちょっと声をおかけしました。「本当に子どものような人です。そして元気のいいのにはこちらもかありません」と奥さまは静かにほほえみながらおっしゃいました。

こんな有名な方の作品を表紙にだけたことを心から感謝しつつ、一筆書かせていただきました。

（赤間）